

南紀熊野の民話

橋杭岩の立岩伝説 鯛島と河内島

南紀熊野の民話

# 橋杭岩の立岩伝説 鯛島と河内島

作 南紀熊野ジオパーク推進協議会

絵 大江 みどり



南紀熊野ジオパーク  
NANKI KUMANO GEOPARK



南紀熊野の民話  
橋杭岩の立岩伝説 鯛島と河内島

初版発行 2022年3月  
制 作 南紀熊野ジオパーク推進協議会  
〒640-8585  
和歌山県和歌山市小松原通一丁目1番地

絵 大江 みどり

編集・印刷 中和印刷紙器株式会社

無断複製・転載を禁じます。

## まえがき

この絵本の橋杭岩の立岩伝説では、  
大地の素晴らしさを伝えるために、実物の  
橋杭岩の上に紙を置いて、鉛筆で凸凹をこすり写す  
フロッターージュという技法を一部用いて描いています。  
本物からうつしとった大地の質感を、  
少しでも感じてほしいという思いを込めました。

大江 みどり



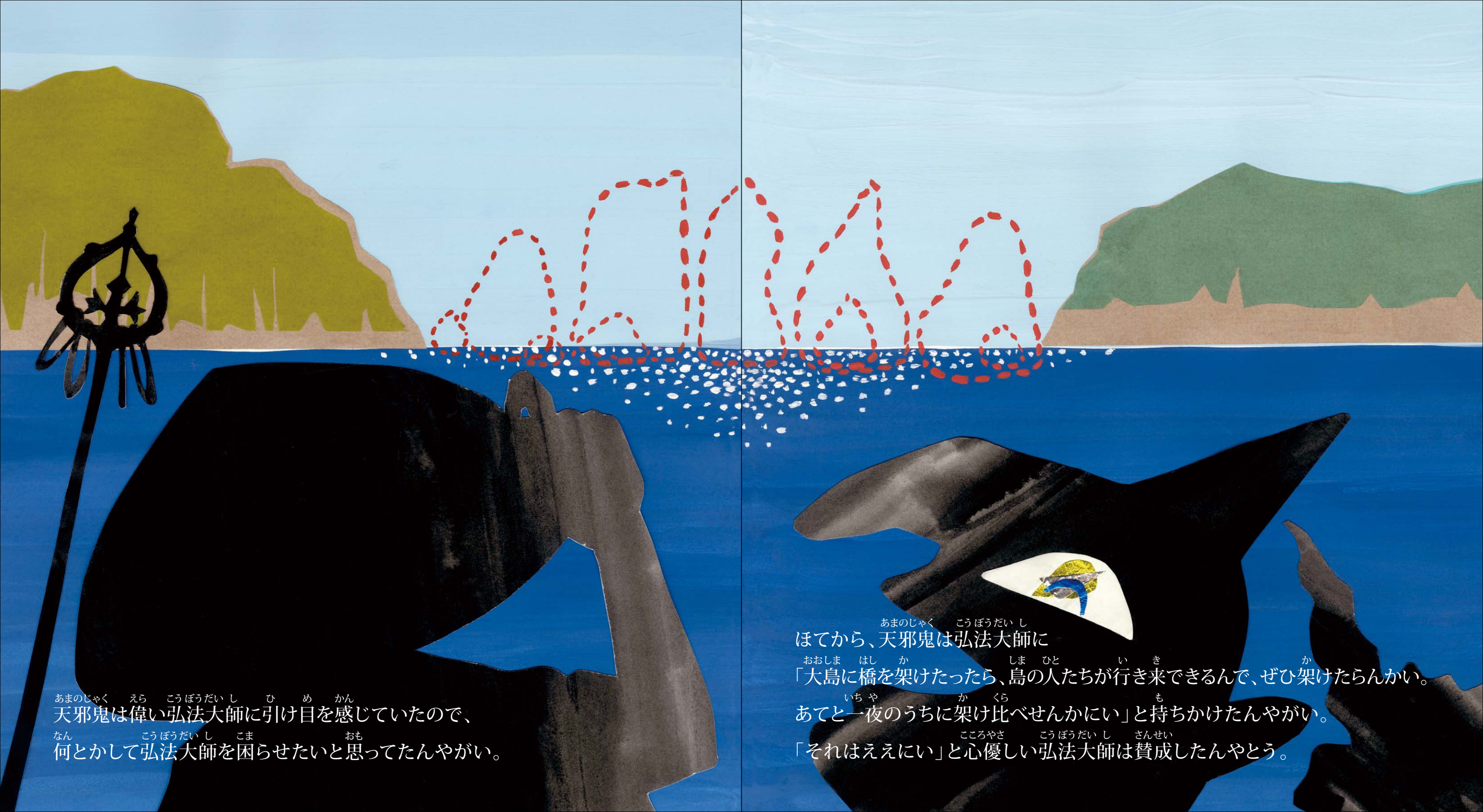
はし ぐい いわ たて いわ でん せつ  
橋杭岩の立岩伝説



むかしむかし、弘法大師と天邪鬼が串本まで来たんやがい。  
串本は海に面した村で、海を挟んで向こう側に大島という島があるんやがい。  
島へは舟で行くんやけど、海がしけこんだら離れ島になる暮らしは不便で、  
やにこい困ってたんやがい。



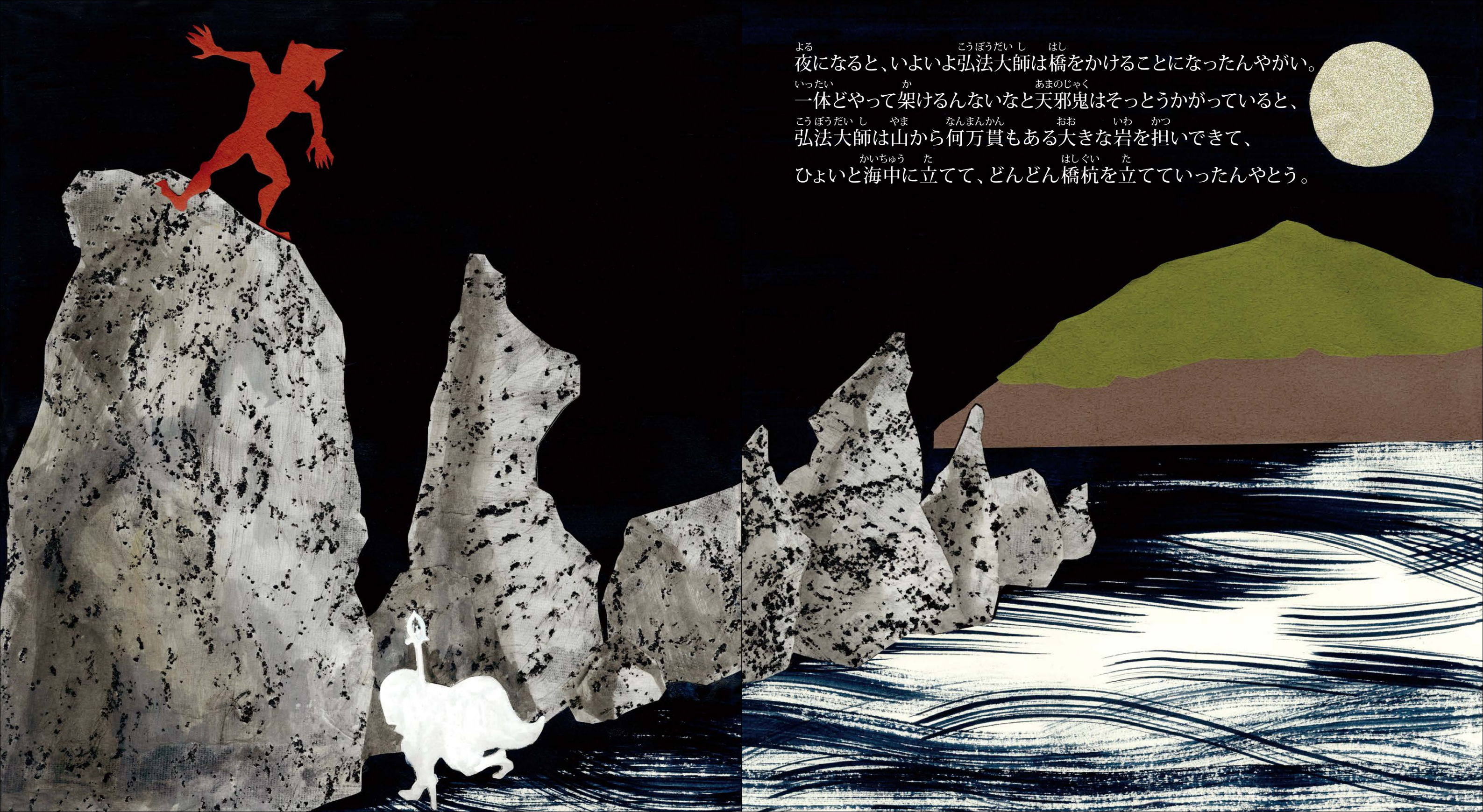




あまのじゃく えら こうぼうだいし ひ め かん  
天邪鬼は偉い弘法大師に引け目を感じていたので、  
なん こうぼうだいし こま おも  
何とかして弘法大師を困らせたいと思ってたんやがい。

あまのじゃく こうぼうだいし  
ほてから、天邪鬼は弘法大師に  
おおしま はし か しま ひと い き か  
「大島に橋を架けたったら、島の人たちが行き来できるんで、ぜひ架けたらんかい。  
いちや か くら も  
あてと一夜のうちに架け比べせんかにい」と持ちかけたんやがい。  
こころやさ こうぼうだいし さんせい  
「それはええにい」と心優しい弘法大師は賛成したんやとう。





よる  
夜になると、いよいよ弘法大師は橋をかけることになったんやがい。  
いったい か あまのじゃく  
一体どやって架けるんないかと天邪鬼はそっとうかがっていると、  
こうぼうだい し やま なんまんかん おお いわ かつ  
弘法大師は山から何万貫もある大きな岩を担いできて、  
かいちゅう た はしぐい た  
ひょいと海中に立てて、どんどん橋杭を立てていったんやとう。



ちょうし はし つく あさ りっ ぱ はし  
「この調子で橋を作ると、朝までには立派な橋ができあがってしまう。

なん じゃ ま ほうほう あまのじゃく かんが  
何とか邪魔する方法はないんやろか」と天邪鬼は考えたんやがい。

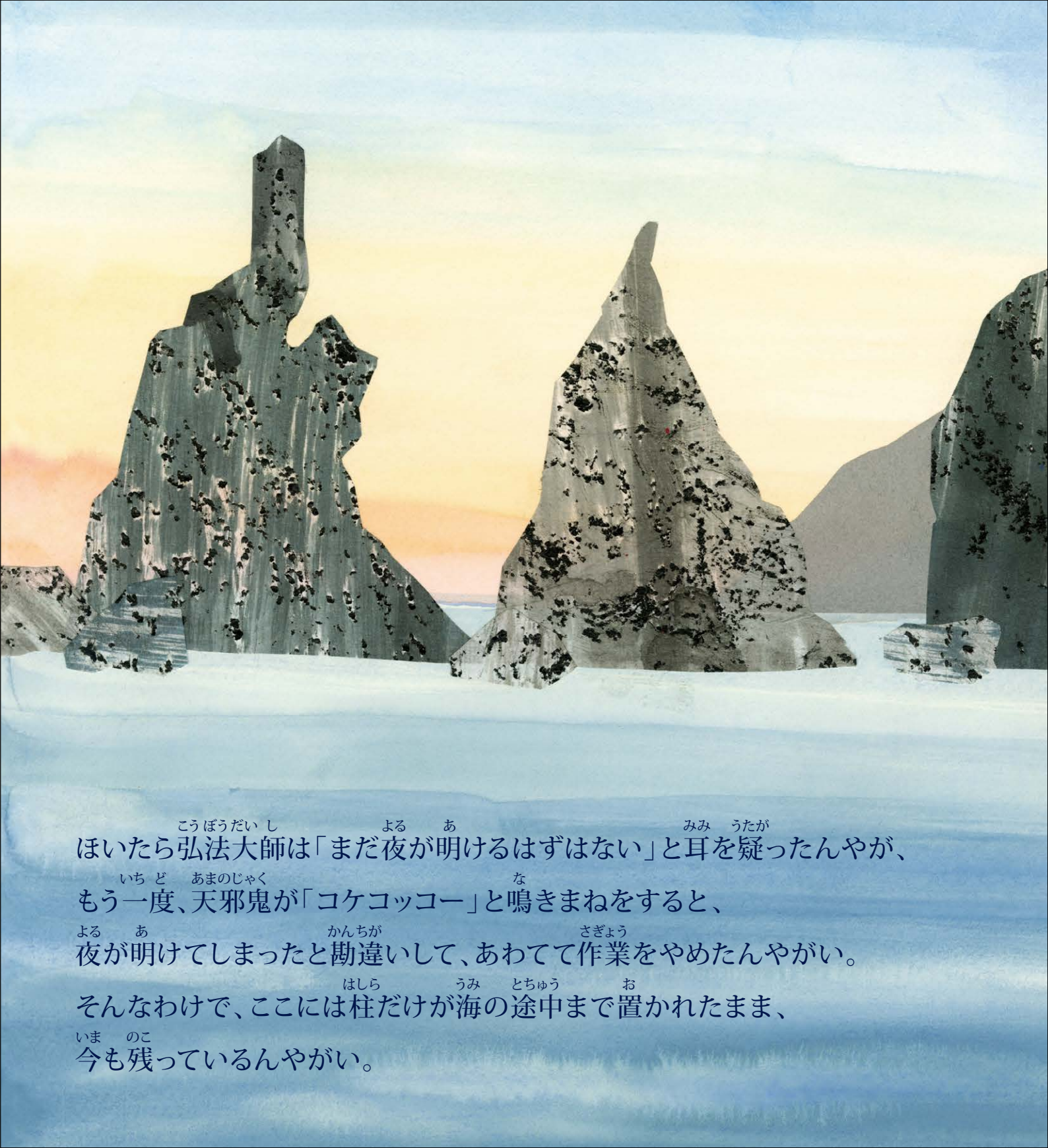
あまのじゃく はな  
ほてから、天邪鬼は鼻をつまんで

「コケコッコー」

にわとり な  
と鶏の鳴きまねをしたんやがい。







こうぼうだいし　よる　あ　みみ　うたが  
ほいたら弘法大師は「まだ夜が明けるはずはない」と耳を疑ったんやが、  
いち　ど　あまのじゃく　な  
もう一度、天邪鬼が「コケコッコー」と鳴きまねをすると、  
よる　あ　かんちが　さぎょう  
夜が明けてしまったと勘違いして、あわてて作業をやめたんやがい。  
はしら　うみ　とちゅう　お  
そんなわけで、ここには柱だけが海の途中まで置かれたまま、  
いま　のこ  
今も残っているんやがい。



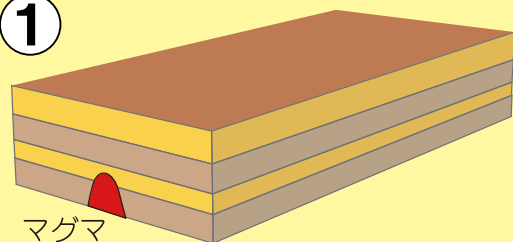
# お話<sup>はなし</sup>でてきた場所<sup>ばしょ</sup>はどんなところ？

## 橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>

串本<sup>くしもと</sup>から紀伊大島<sup>きいおおしま</sup>に向かって立ち上がった岩<sup>いわ</sup>がまっすぐに並んでいます。それが橋をささぐい<sup>ささぐい</sup>のように見えることから橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>と呼ばれています。橋杭岩は波が岩を削ったとき、岩の硬い部分<sup>いわかたぶぶん</sup>だけが残ったものです。橋杭岩は吉野熊野国立公園<sup>よしのくまのこくりつこうえん</sup>地域<sup>ちいき</sup>にあり、国の名勝天然記念物<sup>めいしょうてんねんきねんぶつ</sup>に指定されています。

## 橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>の<sup>かた</sup>でき方

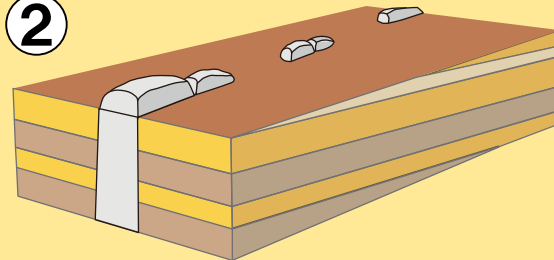
①



マグマ

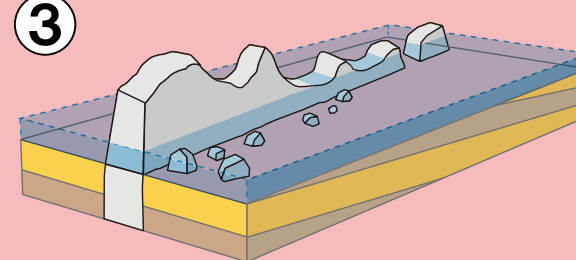
海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>でできた地層<sup>ちそう</sup>にマグマ<sup>まぐま</sup>が細長<sup>ほそなが</sup>く入り込<sup>はいこ</sup>む

②



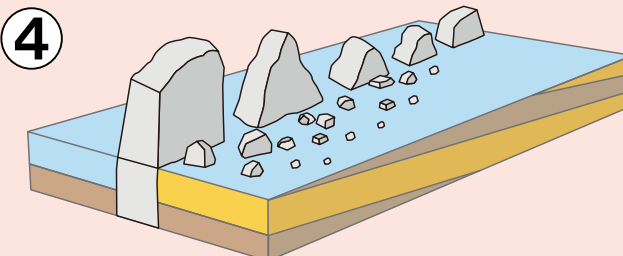
マグマ<sup>まぐま</sup>が冷<sup>ひ</sup>えて固<sup>かた</sup>まる

③



海底<sup>かいてい</sup>が隆起<sup>りゅうき</sup>して、波<sup>なみ</sup>の浸食<sup>しんしょく</sup>を受け、軟らかい堆積岩<sup>たいせきがん</sup>が早<sup>はや</sup>く削<sup>けず</sup>られる

④



火成岩<sup>かせいがん</sup>が直線状<sup>ちよくせんじょう</sup>に残<sup>のこ</sup>り橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>ができる

## 観<sup>かん</sup>察<sup>さつ</sup>してみよう



津波<sup>つなみ</sup>で流<sup>なが</sup>された石<sup>いし</sup>

橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>の奥<sup>おく</sup>に見える<sup>み</sup>たくさんの小さな岩<sup>ちいいわ</sup>は、橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>のかけらです。



これらの小<sup>ちい</sup>さな岩<sup>いわ</sup>は、大<sup>おお</sup>きな地震<sup>じしん</sup>で発生<sup>はっせい</sup>した津波<sup>つなみ</sup>によって流<sup>なが</sup>され、海岸<sup>かいがん</sup>に散<sup>ち</sup>らばりました。



マグマ<sup>まぐま</sup>が入<sup>はい</sup>り込んだ跡<sup>あと</sup>



橋杭岩<sup>はしぐいいわ</sup>の根元<sup>ねもと</sup>では、海<sup>うみ</sup>の中<sup>なか</sup>にできた地層<sup>ちそう</sup>（泥岩<sup>でいがん</sup>）にマグマ<sup>まぐま</sup>が入<sup>はい</sup>り込んだ境目<sup>さかいめ</sup>を観<sup>かん</sup>察<sup>さつ</sup>できます。



たい じま      こう ち じま  
鯛島と河内島

むかしむかし

昔々に～よ。

こ ざ がわ みず

古座川の水がぬくうなってきた春の河口近くの海岸で、

たい こ へび こ なか よ あそ

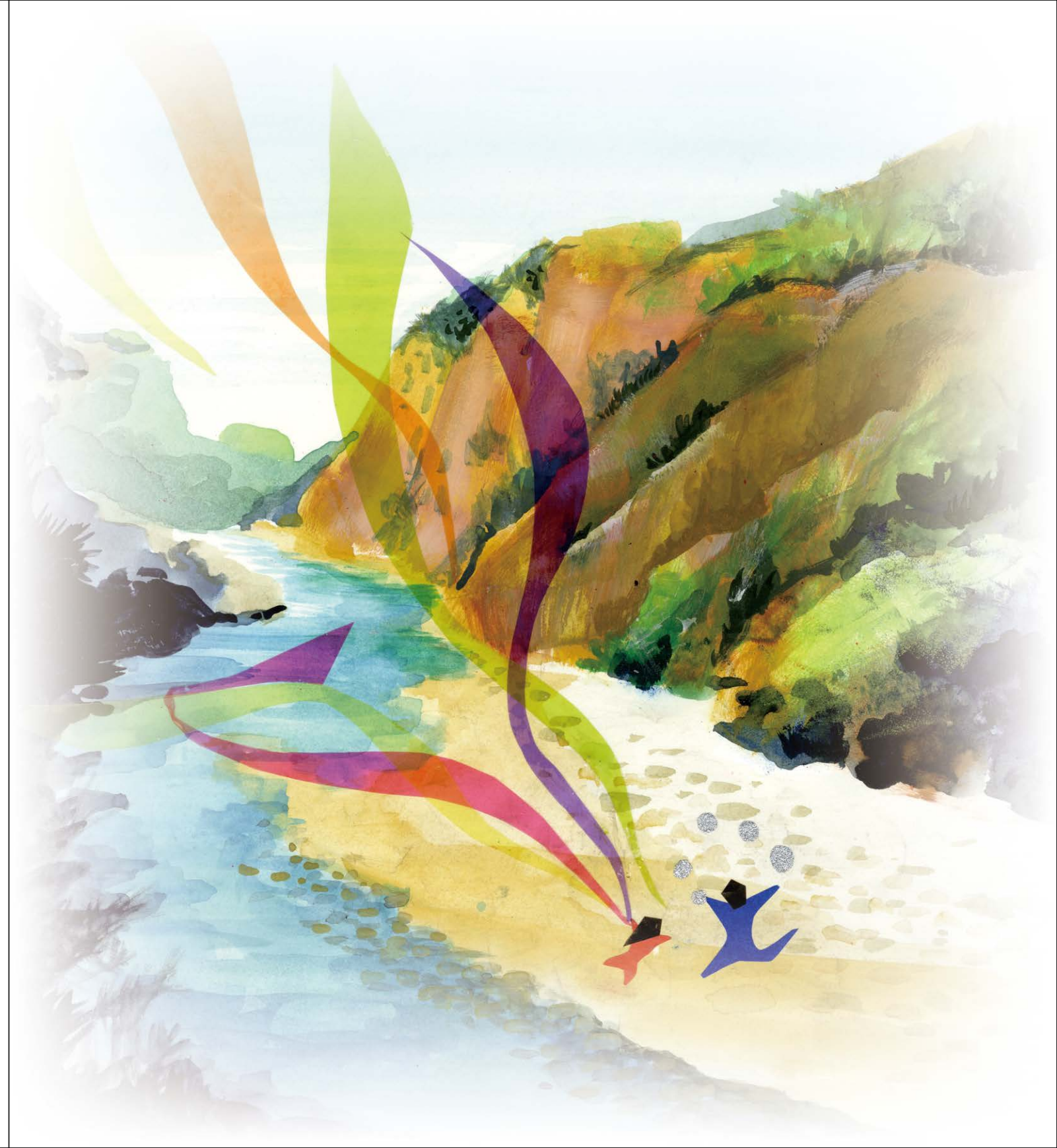
鯛の子と蛇の子が仲良く遊びたわむれていたんやとう。

とし かさ

そして、年を重ねるにつれて、

たが こいごころ いだ

いつしかお互いに恋心を抱くようになったんやんだとう。





へび  
「蛇さん、あんに～よ。

あては大きくなったら海に行かんとあかんのやんだ。

ほいたら、蛇さんはあてのことなんか忘れてしまうやろね」

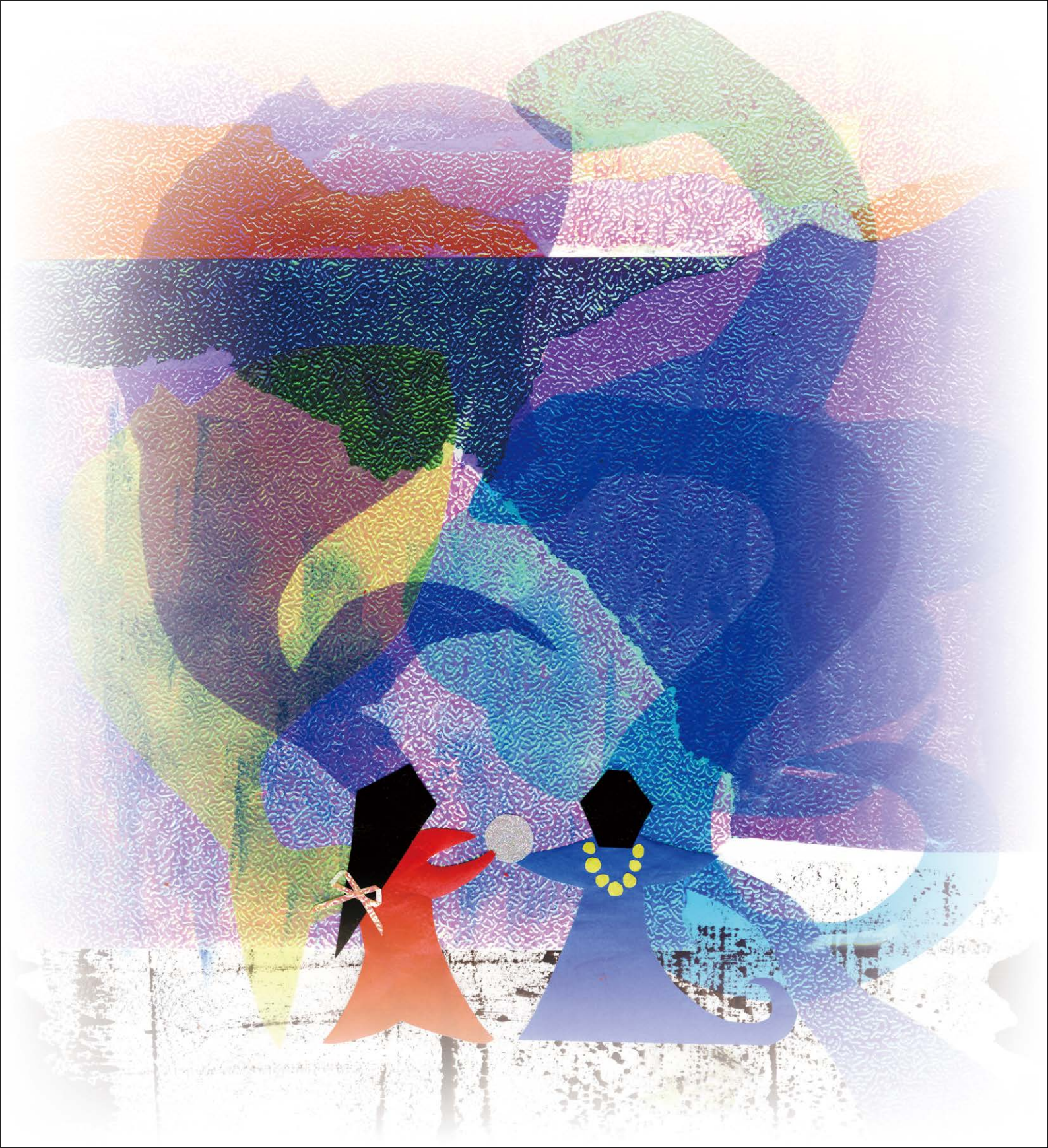
たい こ い  
と鯛の子は言ったんやんだ。

「そんなこと、あるもんかよ。

おまんこそ、あてが大きな蛇になったら、おとろしがって、

あてに寄り付かんようになるんちゃうか」

へび こ い  
と蛇の子は言うたんやんだとう。





そうこうするうち、

<sup>とし おおあめ ふ こ ざ がわ おおみず</sup>  
ある年、大雨が降り古座川が大水であふれたんやとう。

<sup>あそ ば きし ながさ</sup>  
ほたら、遊び場やった岸も流れてしまったんやとう。

<sup>へび し かた たい わか つ</sup>  
蛇は仕方なく鯛に別れを告げ、

<sup>だくりゅう</sup>  
濁流をさかのぼっていったんやんだ。

<sup>たい へび かな み おく</sup>  
鯛は、そんな蛇を悲しく見送り、

<sup>じ ぶん かえ うんめい さと うみ およ い</sup>  
自分も帰る運命を悟り、海へ泳いで行ったんやとう。





たい へび  
鯛と蛇はこのようにして

はな ばな  
離れ離れになってしまったんやけど、

たが かんぜん わす  
お互いに完全に忘れられず、

こい  
恋しさはつのはかりやったんやとう。

ほてから、とうとう鯛も蛇も岩になってしまったんやんだ。

しゅうらく ひと  
集落の人たちは、

たい いわ たいじま へび いわ こうち じま  
鯛が岩になったのを鯛島、蛇が岩になったのを河内島と

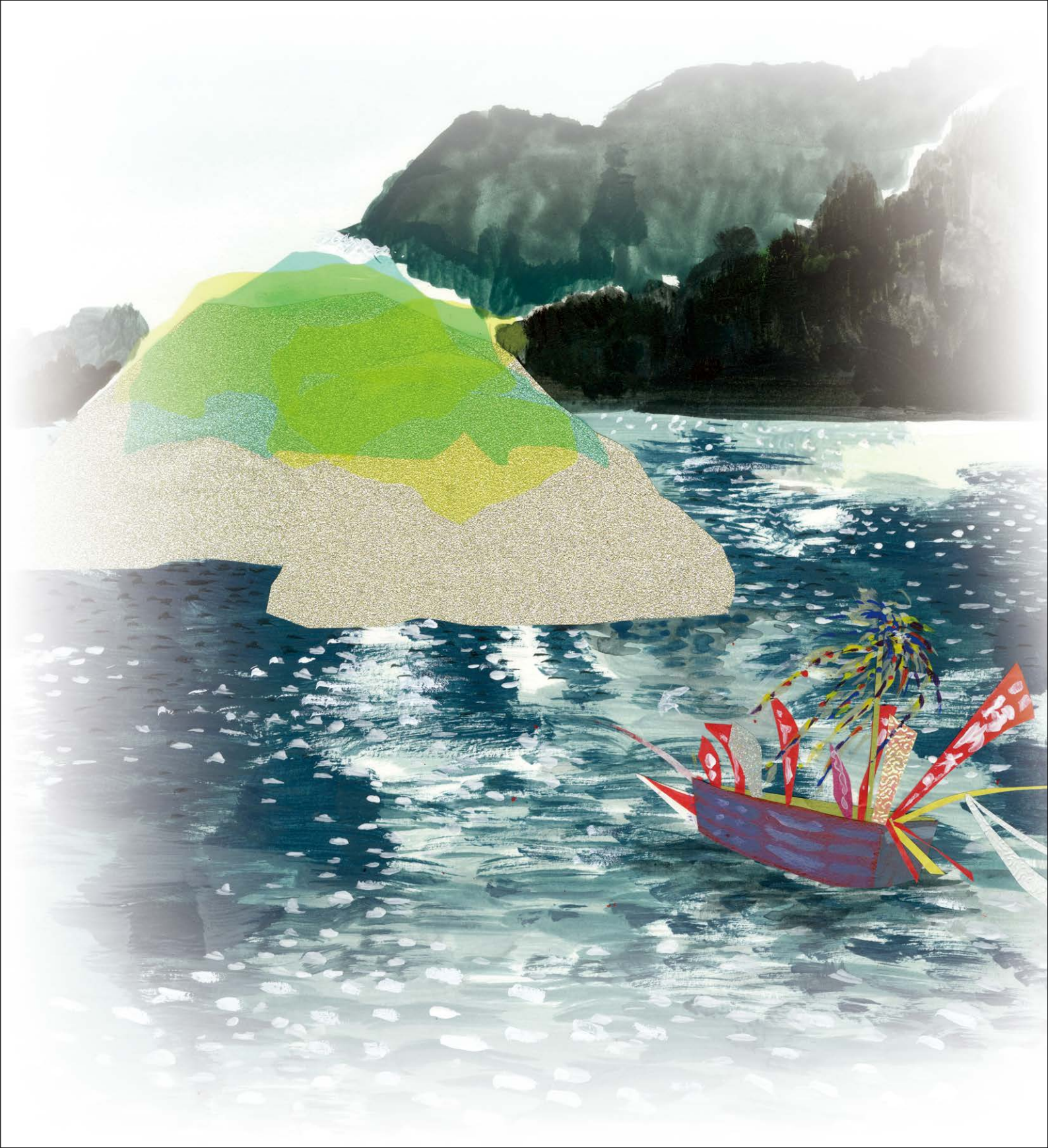
よ  
呼ぶようになったんやとう。





し      べんてん      だいこく      そうだん      すえ  
これを知った弁天さんと大黒さんは相談の末、  
たい      へび      りょうし      ふね  
鯛と蛇をあわせてやるために漁師に舟をつくらせ、  
いちねん      いちど      たい      ふね      の      こ      ざ      がわ  
一年に一度だけ、鯛を舟に乗せて古座川をのぼらせ、  
へび  
蛇にあわせてやることになったんやとう。

こ      ざ      こうちまつり      はじ  
これが古座の河内祭の始まりやんだ～。





# はなしで お話で出てきた場所は どんなところ？

## こうち じま 河内島

撮影：神保圭志



## たい じま 鯛島



こうち じま 河内島はマグマが固まった流紋岩とよばれる硬い岩でできています。  
こ ざ がわ 古座川にはかつて紀伊半島で発生した巨  
だい か ざんかつどう なごり いわ おびょう つら  
大な火山活動の名残がある岩が帯状に連  
なっています(古座川弧状岩脈)。古座川  
いちまいいわ たかいけ むしくいいわ こうち じま  
の一枚岩や高池の虫喰岩とともに河内島  
もその一部です。  
こうち じま じ たい 河内島自体が「河内様(こおったま)」と呼  
ばれる御神体になっており、社殿・鳥居は  
ありませんが、岩や木、森など自然そのも  
のを神とする最も古い様式の神社です。

たい じま 鯛島はれき岩と呼ばれる小石が集まって  
かた 固まった岩からできています。このれき岩  
となり くろ しま み なん きくま の なか  
は隣の九龍島でも見られ、南紀熊野の中  
では時代の新しい地層だと考えられてい  
ます。鯛島は地層の中で硬くなった部分  
が波に削られずに残った場所です。

こうち まつり 河内祭  
こ ざ がわ りゅう いき ちく こ ざ ふる た たかいけ し む ぶ う つ ぎ つきの せ  
古座川流域の5地区(古座、古田、高池下部、宇津木、月野瀬)  
が担い手となつて行われてきた伝統祭礼です。祭りでは飾り立てられた御  
ふね こ ざ がわ か こう じょうりゅう こうち じま さかのぼ こうち まつり み ふね ぎょう じ  
船が古座川河口から3km上流の河内島まで遡ります。河内祭の御船行事  
として国指定重要無形民俗文化財に指定されています。河内祭は7月第4  
しゅう め ど にち かいさい  
週目の土日に開催されます。



たい じま み 鯛島で見られるれき岩

民話とは、昔の人が口から口へと語り継いできたものです。語り継がれてきたものなので、いろいろな話が存在しています。  
本書に収録した民話は、そのうちのひとつで、「橋杭岩の立岩伝説」は串本弁、「鯛島と河内島」は古座弁で書いています。

## 橋杭岩の立岩伝説

昔々、弘法大師と天の邪鬼が熊野地方の串本までやって来ました。串本は海に面した村で、海を挟んで向こう側には大島という島がありました。島へは舟で向かうのですが、海が荒れると離れ小島になる人々の暮らしは不便で、たいそう困っていました。

天の邪鬼は、偉い弘法大師に引け目を感じていたため、何とかして弘法大師を困らせたいと思っていました。そこで、天の邪鬼は弘法大師に、「大島へ橋を架ければ島の人たちが行き来できるので、ぜひ架けましょう。私と一夜の間に架けくらべをしましょう。」と持ちかけました。「それは良い」と心優しい弘法大師は賛成しました。

天の邪鬼は、いかに偉い弘法大師でも、まさか一夜で橋を架けることはできまい。今にきつと困るだろうと内心喜んでいました。

夜になると、いよいよ弘法大師は橋を架けることになりました。一体どうして架けるのだろうと、天の邪鬼はそつとうかがっていると、弘法大師は山から何万貫もある大きな岩を担いできて、ひょいと海中に立ててどんどん橋杭を立てていきました。

「この調子で橋を作ると朝までには立派な橋が出来上がってしまう。何とか邪魔をする方法はないものだろうか」と天の邪鬼は考えました。そこで、天の邪鬼は鼻をつまんで「コケコッコ」と鶏の鳴きまねをしました。

すると、弘法大師は「まだ夜が明けるはずはない」と耳を疑いましたが、もう一度天の邪鬼が「コケコッコ」と鳴きまねをすると、夜が明けてしまったと勘違いして、あわてて作業を止めてしまいました。そんなわけで、ここには柱だけが海の途中まで置かれたまま、今もなお残っているのです。

## 鯛島と河内島

昔々、古座川の水があたたかくなってきた春の河口近くの海岸で、鯛の子と蛇の子が仲良く毎日遊びたわむれていました。そして、年を重ねるにつれて、いつしかお互いに恋心を抱くようになりました。

「蛇さん、あのね。私は大きくなったら海に行かなければならないの。そうしたら、蛇さんは私のことなんか忘れてしまうでしょうね」と鯛の子は言いました。

「そんなことはありませんよ。あなたこそ私が大きな蛇になったら、恐ろしがつて私に寄りつかなくなるのと違うだろうか」と蛇の子は言いました。

そうこうするうち、ある年、大雨が降り古座川が大水であふれてしまいました。そのため、遊び場だった岸も流れてしまいました。蛇は仕方なく鯛に別れをつけ、だく流をさかのぼって行きました。

鯛はそんな蛇を悲しく見送り、自分も帰る運命を悟り、海へ泳いで行きました。

鯛と蛇はこのようにして離れ離れになってしまいましたが、お互いに完全に忘れられず、恋しさはつのるばかりでした。それで、とうとう鯛も蛇も岩になってしまいました。

集落の人たちは、鯛が岩になったものを鯛島、蛇が岩になったものを河内島と呼ぶようになりました。

これを知った弁天さんと大黒さんは相談の末、鯛と蛇を逢わせてやるために漁師に舟をつくらせ、一年に一度だけ、鯛を船に乗せて古座川を上らせ蛇に逢わせてやることになりました。

これが古座の河内祭りの始まりだそうです。